

博士論文要旨
Abstract of Doctoral Dissertation

太平洋を横断するクエーカーの平和：
戦前・戦中・戦後におけるエステルB.ローズの活動を中心に

Quaker Peace Making Across the Pacific:
Esther B. Rhoads and Her Work Before, During and After World War II

国際基督教大学 大学院
アーツ・サイエンス研究科

Presented to
International Christian University
Graduate School of Arts and Sciences

2020年4月23日
April 23, 2020

郷戸夏子
GODO, Natsuko

博士論文 要旨

序章

本論文の目的は、戦後日本における平和主義の系譜を戦前から戦後の連続性のなかから明らかにすることである。特にキリスト教の一派であるフレンド派（クエーカー）の宣教師 エスター・B.ローズ（Esther B. Rhoads, 1896-1979）の軌跡に焦点をあてて、検討する。そして、彼女が活動した日本とアメリカでの社会的・思想的文脈を検討することを通じて、ローズそしてフレンド派の平和主義の特質と日本への影響を析出する。ひいては戦後日本の平和主義に新たな理解を提起することが本研究の目的である。

従来の研究では、フレンド派に関して、日本と欧米での研究の分断と、第二次世界大戦を境にして、戦前、戦中、戦後という時代による二つの分断がみられた。そのため、日米を横断するフレンド派の救援活動はこれまでその全体像が捉えられずにきた。フレンド派による救援活動は、日本とアメリカという国家の枠を超え、宗教や人種を超えた活動であり、研究領域と時代の枠を超えて検討することが必要である。本研究においては、これら二つの分断を乗り越えるために、長期にわたり広域的に活動した人物に注目する。具体的には、フレンド派の宣教師として長年日本での活動に従事したエスター・B.ローズの活動に焦点をあてる。戦前から戦後の連続性のなかでローズの活動を明らかにすることで、国家の枠を超えたフレンド派の国際救援活動の連続性を析出することを可能となるだろう。

本論文の中心となるエスター・B.ローズは、アメリカのペンシルバニア州フィラデルフィア出身であり、両親ともに熱心なフレンド派の家庭に生まれた。ローズは1917年に宣教師として来日し、東京の普連土女学校で教師として勤務した。1923年の関東大震災の際には日本フレンズ奉仕団のメンバーとして、救済活動に携わった。第二次世界大戦時には、AFSCの職員としてカリフォルニア地域の日系アメリカ人の支援活動に携わった。そして、戦後はAFSCの駐日代表として、ララ物資の日本国内における管理と分配を担当した。

ローズは、戦前から戦後にかけて、一貫して日本人及び日系人と関わり、フレンド派の信条である平和主義を実践した一人であったと考えられる。また日本での滞在経験はローズに多くの日本人クリスチャンと交友関係を築くことを可能にした。この関係は戦前から戦後において途切れることなく続いた。そのため、戦後再来日した際には多くの日本人クリスチャンと再会し、占領期の日本において占領軍とは異なる立場で日本人に接したアメリカ人の一人として、みることができる。このように本研究ではローズの存在を、複眼的に捉え

ることを心がける。そして、戦前からの日米のクエーカーの人的ネットワークの存在が、戦後、ララ救済物資を分配する際や占領政策においてアメリカというものを示す際に、効果的に機能したのではないかと推測し、明らかにする。そして、「日米の和解」という課題になぜフレンド派が大きな役割を果たしたのということをローズの通じて明らかにする。

第一章

第一章では、ローズがフレンド派宣教師として派遣される土壌がいかなるものであったのかを、宗教的、地理的、人的なつながりから検討する。はじめにフィラデルフィアにおけるフレンド派という観点から宗教的そして地理的な背景を明らかにし、ローズのような人物を輩出した理由を検討する。次に、フィラデルフィアにおけるフレンド派と日本との関わりに光を当てることでローズ来日という出来事をより長期の時間軸の中で考察する。そして、フィラデルフィアのフレンドが宣教師を派遣するにいたる状況を明らかにし、ローズが日本にやってくる道程をさぐる。

17世紀イングランドの国教会体制のもと迫害を受けたフレンド派の人々が「信教の自由」のもとで暮らすことのできた地が、ペンシルバニア州であった。そして、19世紀に到るまで政治においても経済においても、その中心となったのが、フィラデルフィアであった。このフィラデルフィアを中心にフレンド派の人々は活動を拡大し、各都市部にフレンド派の年会を形成していった。フレンド派が拡大する中で、19世紀アメリカでおこったフレンド派の内部分裂は、内なる光と聖書の権威の解釈を巡る対立から発生した分裂であり、このことはフレンド派の信仰の多様性、解釈の違いから発生した。個人の経験を重視するフレンド派であったからこそ、キリスト教への理解が多様化した結果生じた分裂であったと考えられる。また信仰復興運動の影響から、これまで沈黙の礼拝、プログラムのない礼拝がおこなわれていたフレンド派の集会に牧会制度のある年会が誕生したことも重要な変化の点であった。そしてこの分裂によって生じた各教派による信仰活動の活性化が、教育施設の拡充や海外伝道など、フレンド派の活動の幅を広めることにつながった。

次にモリス家、エルキントン家、ローズ家という3つの家族からフィラデルフィアにおけるフレンド派と日本との関わりを検討する。彼らに共通する点は女性の活動を認め、フィラデルフィア年会正統派に属するフレンド派であり、中流以上の人々であるということ、そして海外伝道への協力を惜しまなかったことが挙げられる。モリス家はフィラデルフィアにおける留学生の支援者として、また海外伝道における支援者としてフィラデルフィアと日

本との関わり支える人物であった。エルキントン家はメアリと新渡戸稲造との繋がりから日本との関わりが始まり、津田梅子への支援や北米のフレンド派をまとめ、AFSCの議長として戦中から戦後日米関係において指揮する立場として日本との関わりを持ち続けた。そしてローズ家は、祖父の代から海外伝道への関心を持ち、家族にとって海外伝道、日本伝道が身近なこととして家族に受容されていたと考えられる。このことはローズ家において、長期間、海外伝道に従事するローズが誕生する土壌となった。

次に、エスター・B.ローズが参加することになるフィラデルフィアにおけるフレンド派の海外伝道について概観し、どのような背景で彼らが海外伝道を志し、組織し、日本伝道を開始したのかを検討する。19世紀から20世紀にかけて展開されたアメリカのプロテスタント教会の海外伝道は女性の活動の場であり、彼女たちの宗教性を示す機会でもあった。フレンド派による海外伝道は、その信仰との関わりから、積極的な活動の開始は他の教派よりも遅いものとなったが、福音主義的な年会を中心に徐々に広まっていった。そのなかでも日本への海外伝道を志す正統派フィラデルフィア年会の一部の女性によるフィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会（the Women's Foreign Missionary Association of Friends of Philadelphia, WFMA）は、1885年11月に日本へ宣教師を派遣し、女子教育の拡充を進めていった。その後、海外伝道はフィラデルフィア年会の伝道局の管轄となり、多くの宣教師を日本へ派遣することとなる。このような背景を有しながら、1917年にエスター・B.ローズは来日することとなる。

特にフィラデルフィアはペンシルバニア州の中心であり、19世紀中頃に日本の政治家や留学生も多く訪問する都市であった。フレンド派のモリス家やエルキントン家、ローズ家は日本人との交流が見られた。彼らは明治以降、日本への訪問や日本人との交流を通し、日米におけるフレンド派のネットワークを構築していった。そして、1885年に日本へ宣教師を送るにあたり、フィラデルフィア・フレンド婦人海外伝道協会はこのネットワークを活用し、宣教師を日本へと派遣するに至った。

第二章

第二章において、フレンド派の初代宣教師ジョセフ・コサンドの時代から、ギルバート・ポールズ、エスター・B・ローズと3人の宣教師を中心に日本とアメリカにおけるフレンド派の活動を検討する。

1885年から1900年までの初代宣教師コサンドの時代は、宣教師、日本人、伝道協会がそれぞれ困難に直面した時代であった。その中で普連土女学校の設立や、茨城県での伝道の成果はコサンドを始めとする宣教師たちの功績であった。しかしながら、アメリカにおけるフレンド派の二つの異なる礼拝方法が日本でも展開され、一人の宣教師に権力が集中することとなった。そして日清戦争に際し、フレンド派の教義の一つである平和主義を理解せずフレンド派を名乗る日本人フレンドの存在が明るみにでたことは、伝道の難しさとともに、改めてフレンド派の教義を考える機会となった。

コサンドの退任により、新たに1901年ボールズが日本に着任した。この頃から1917年の時期は、日本でもアメリカにおいても、これまで個々で活動していた運動が組織化され、より大きな力をもって伝道や救援活動を展開した時代であった。ボールズは、普連土女学校での活動に加え、日本人の政治家たちとともに「大日本平和協会」とよばれる団体を組織し、日本における平和運動を開始した。ボールズを中心に創設されたこの協会は、日本における平和の重要性を自覚しつつも、満州事変勃発後は体制側の主張と同調することとなった。しかしながら、この時期にさまざまな平和を願う団体が組織され、フレンド派の人々がその組織に関わったことは日本における平和主義を考える上で重要な点である。そして1917年にはフレンド派の救援団体であるアメリカ・フレンズ奉仕団（AFSC）が組織され、ヨーロッパでの救援活動を開始した年でもある。AFSCの結成は分裂したフレンド派の再生の意味もあり、より大きな力をもって組織的に救援活動を展開できる可能性を模索したものであった。このAFSCの結成は、当時ヤングフレンズとして活動していたローズにも影響を与え、来日の布石となった。

このような状況で1917年9月ジャーマンタウン月会出身の宣教師、エスター・B.ローズが教師として来日する。多くの女性宣教師は2~4年の活動期間で帰国する中、ローズは何度もアメリカに帰国しては、日本に戻ってきた。ローズのように長期間にわたり日米を行き来したフレンド派の女性宣教師は少ない。来日当初、21歳であったローズは日本の様々な物事に関心を持ち家族への手紙に記録した。特に女性の生き方や行動に関心を持ち観察していたことが書簡から明らかとなっている。日米を行き来したローズは帰国するたびに米国で学び、その学びを普連土女学校での教育に生かしていった。関東大震災の際には、基督友会の日本フレンズ奉仕団の一員として、主に普連土女学校の学生とともに、裁縫での衣類の調達、修繕などの救援活動を行った。この長期わたる日本での滞在は、ローズに多くの日本人の友人を与え、日本語習得も可能とした。1930年以降は軍国主義の影響が徐々に普連

土女学校にも及んだことを手紙で報告していた。1939年に中国の南京や上海に行った際には、物事を解決する手段としての戦争を批判する言葉を残している。戦争という手段は最も平和の実現を遠のかせる行為であり、ローズは、平和の実現の困難を感じていたと考えられる。このような状況にも関わらず、ローズは日本で活動を望み、1940年の一時帰国まで日本のフレンドと普連土女学校のために活動することを選んだ。

第三章

本章では主に太平洋戦争が始まった1941年12月から日本の敗戦にいたる1945年までを対象に、ローズのアメリカでの活動を探る。戦時中、AFSCのスタッフとして日系アメリカ人への救援活動に携わったローズはどのような活動を行い、日本での滞在経験はどのように活かされたのだろうか。またローズの日系人へのまなざしと日系アメリカ人のローズへのまなざしはどのようなものだったのかを明らかにする。これらを明らかにすることでローズの戦中の活動の一端を探り、戦前と戦後との繋がりを解く重要な部分の解明を目指す。

はじめに日系アメリカ人のおかれた状況を真珠湾攻撃以前から確認し、真珠湾攻撃を契機として日系人が立ち退きを要求されるまでの経緯を確認した。このような日系アメリカ人に対し、フレンド派のフィラデルフィア年会伝道局とAFSCはそれぞれ支援の手を差し伸べた。当時アメリカに帰国していたローズは、太平洋戦争が始まる前からAFSCの活動に携わっていたことから、引き続きAFSCでの活動を継続した。しかしながら、ローズの所属は1943年になるまではフィラデルフィア年会であり、AFSCの活動はあくまでもボランティアとしての活動であったと考えられる。ローズの高い日本語能力と人々に対する姿勢は、AFSCが救援活動を行う際に、理想とする人物であったことも明らかとなった。

次にローズの手紙や報告書から彼女の具体的な活動を探る。AFSCのメンバーとしてのローズの活動は、日系人との直接の交流やホステルの開設、中東部大学の大学への転学支援など多岐にわたっていた。特にローズの日本語能力だけではなく、日系人へ眼差しや接し方から彼女の細やかな気遣いも書簡や報告書から明らかとなった。ローズは混乱する状況においても日系アメリカ人の一人一人の置かれた状況に寄り添い、彼らがより良い環境で生活できるよう奉仕した。このような一人一人を大切に扱うローズの姿勢から、日系アメリカ人もローズに対し、信頼を寄せた、と考えられる。

またローズと日系人の関わりから、彼女が日系アメリカ人の不安や不満を少しでも解決できるようにと心がけたことを明らかにした。ヒラリーバー戦時転住所において日系アメリ

カ人と同じ部屋を希望するなど、ローズがあくまでも日系人の側に立とうとしたことを紹介した。このようなローズの振る舞いは、彼女の日本語能力と共に、日系人がローズを信頼する要因となったと考えられる。

また 1945 年 6 月 28 日に米国国務省国務次官のジョセフ・グルーとの会談に伝道局のエルキントンと共に臨んだことは、ローズがフィラデルフィア年会において日本部門の専門家として認められていたことを示している。

真珠湾攻撃の翌日にはカリフォルニアに到着したローズの行動力と今後の予見は、ローズのこれまでの経験が可能としたと考えられる。長期にわたる日本での生活はローズが高い日本語能力を得ることを可能とし、このことは、特に英語の話せない日系一世との対話に大いに役立った。AFSC は日系アメリカ人と頻繁に連絡を取り合うことを重視したので、日本語を理解し、相手を尊重して接することのできるローズのような存在は、救援活動において大いに必要とされた。またローズの仕事の多くは机に向かうものではなく、現地を訪れ、一人一人の人間と向き合う活動であった。このようなローズの行動は多くの人々に彼女の存在を知らしめる機会となり、本人が語らなくとも、人々の記憶や手紙の中で取り上げられる存在となっていった。このような人物であったからこそ、戦後再び日本へ戻り、AFSC の駐日代表として、ララ救援物資の責任者となったと考えられる。

開戦直後は再来日を希望していたローズであったが、新たな仕事として、日系人への救援活動に携わることとなった。ローズはアメリカにおいて何ができるのかと考えた時に、自らの持つ能力と支援を必要とする現実社会と向き合い、自らこの活動を選択したものと考えられる。

第四章

第四章では、戦後 AFSC の駐日代表として再び来日したローズのララ救援物資における活動を中心に検討する。また戦後日本における日本人クリスチャンとの関わりや、物資を贈った側、受容した側がのようにララ物資と関わったのかも考察する。これらを明らかにすることで、AFSC の代表として来日したローズが、戦後の日本をどのように受け止め、日本の復興に寄与したのかも検討したい。

多くの人びとが食糧不足でギリギリの生活をするなかで、1946 年 11 月 30 日アメリカから救援物資をのせた船が横浜に到着した。この救援物資はアジア救援公認団体 (Licensed Agencies for Relief in Asia) 通称ララによるものであり、ララは戦後日本への救援物資を送っ

た組織の一つであった。この団体によって贈られた救援物資をララ物資と呼ぶ。ララはアメリカのキリスト教団体や民間団体によって組織された救援組織であり、1952年の活動終了までに日本人の1400万人以上がその救援物資を受け取ったとされている。エスター・B.ローズは、ララに参加したAFSCの駐日代表の一人として、1946年6月に再び来日を果たした。

ローズは、ララの結成時から終了まで駐日代表として活動した唯一の人物であり、彼女がララ物資の活動において中心的な役割を果たしたことは明らかである。1946年6月22日に神奈川県厚木飛行場に到着したローズは、横浜から東京へ向かうバスから見ると「ほとんどが平らになっていて、壊れた瓦礫の山がまるで地震のあとのようでした」と荒廃した日本の様子を日記に記した。また東京に近づくと、「戻ってきた喜びと動揺した悲しみが入り混じっていましたが、喜びの方が大きかったです」と日本に戻ってきた喜びを語った。到着後、ローズはもう一人の駐日代表であるマキロップ神父とともに厚生省を訪問し、ララ物資について説明した。二人は来日直後に、厚生省を訪問し、ララの計画を日本政府に伝えたことから、日本の食糧事情が非常に逼迫していたことがわかる。その一方で、ローズは日本到着後すぐに、普連土女学校やフレンド派のミーティングハウス、津田塾に頻繁に通い、友人との時間を楽しんだ。

AFSCの駐日代表としてのローズの役割は、一つ目に日本側との協力のもとララ物資を届けること、二つ目にさまざまな地域の施設の状況を調査し、何が必要であるか、適切に物資が配布されているかを確認することであった。三つ目がAFSCとの連絡であった。これらの活動は全てが連続し、円滑に物資を各施設に届けるためにはどれ一つ欠かせない仕事であった。またローズの立場は、ララ物資を円滑に進めるための「調整役」でもあった。

特に戦前の日本を知るローズは、戦前からの変化を細く観察し、AFSCに報告した。また関西地方への視察では、乳児院や児童福祉施設、養護院、母子寮などの施設を中心に訪問し、子供達のおかれた状況と栄養状態の悪さを知った。そして、ローズはまず、子供たちのミルクを最優先とし、本国のAFSCに救援物資の要求をおこなった。最も弱い立場の人々に寄り添う姿勢は、フレンド派の人々がこれまでの歴史において、繰り返してきたことである。戦争孤児や戦争未亡人の状況を少しでも改善することが、フレンド派としてのローズの信仰の実践であったと考えられる。また救援物資に加え、精神的な充足感を与えるために、クリスマスプレゼントを送ることも計画された。このような配慮は、AFSCが

戦時中の日系アメリカ人に対しても心がけた点であり、ローズはアメリカでの経験を日本でも応用し、救援活動の重要な点であると考えていたことが明らかとなった。

このような活動の背景には、ローズの活動を支えた人々が存在し、彼らとの関わりは救援活動の一端を明らかにする上で重要となる。ローズの活動を支えた人々として、主にフレンド派の人々が挙げられる。1947年8月の軽井沢でのリトリートには、皇室の家庭教師であるエリザベス・G. ヴァイニングを始め、フレンド派の鞍馬菊枝、普連土学園校長の石田トシ、普連土学園教師の浦口眞左や島崎折江（のちに、普連土学園校長）、ララ中央委員会の鮎沢巖などが集まった。またフレンド派ではないが恵泉女学園学長の河井道も参加していた。ローズの書簡には、彼らとの軽井沢での日々が綴られており、彼女の周囲に日米の友人、特にクリスチャンが多く存在した。この点はGHQの将校たちとは異なる点である。ローズは日常的に日本人と交流することで、日本というものを実体験し、日本人の生活状況などを理解した。この経験はローズが物資を手配する際に有益に作用し、日本人とのネットワークは分配の際に非常に役立ったと考えられる。

また物資を幅広く集めるため、ローズや駐日代表のバット博士、鮎沢巖、ヴァイニングなどがアメリカでの講演旅行へ向かった。それぞれ出発した時期は異なるが、この講演旅行の目的はアメリカ、特に日系アメリカ人にララ物資の報告と日本政府に代わり感謝の意を伝えることであった。そして、日本の現状を伝え、継続的な資金援助、物資の調達を図ることを目指し、彼らはアメリカでの講演旅行を積極的に行った。

このよう日米の人々の尽力によって集められたララ物資に対して、日本人からの感謝の手紙送られた。ララ物資を受け取った人々からの感謝の手紙には、アメリカへの感謝の言葉が綴られたが、多くの物資を日系人が送ったということは理解していなかった。その一方で、ララ物資は受け取った日本人が平和や民主主義を考えるきっかけとなったと考える。このことは、平和や民主主義の思想を上からの制度としてではなく、実物の救援物資を通して人々に伝える役割を果たしたと考えられる。

また「戦争自体が悪である」という立場に立つローズは、AFSCの新たな事業として、国際学生セミナーを企画した。戦後、敵国同士たった若者たちが対話を通して、互いに理解し合い、将来、平和を实践する人物となるよう期待を込めてこの活動は開始された。そして、その根本には、平和主義と一人一人の人間の可能性を信じるフレンド派の信条があったと考えられる。

このようなローズの活動を支えた日米のクリスチャンネットワークは、ララ物資の分配や、調査、国際学生セミナーの運営において彼女を支援するものとなった。

終章

以上のことから、本研究を通じ分かったことが四つある。

一つ目に、エスター・B.ローズの平和主義についてである。ローズの平和主義は三つの観点からみることができる。一つ目に、救援活動を通して、実践する平和主義であったこと。関東大震災や日系人への救援活動、ララ救援物資の活動を通して、ローズは自らの信仰を実践した。このことは、言葉ではなく行動として、平和への道を示すことであった。特にララ物資を通して、日本人の健康状態を改善し、早く安定した生活となるよう、ローズは多くの時間をこの活動に割いた。ララはローズにとっての平和主義の実践であった。二つ目にローズの平和主義は「人類はどの国に属していても、皆之神の愛子である」という信仰に基づくものだったということである。これは、第一次世界大戦に際しローズが記したことである。第二次世界大戦後の日本においてもローズは「日本だけが誤った戦争を仕掛けたのではないと思います、(中略)戦争をするのはどちらも悪いのです。又どちらも責任を負わなければなりません」という考えを明らかにした。これは、人間はみな神の子供であり、等しく平等であるという万人司祭の考えにフレンド派の平等主義の教義に基づく信仰である。平等の観点から考えると、ローズは、戦争に参加したどちらの国も等しく責任を負う必要があると考えていた。そして、三つ目に、ローズの平和主義は、戦後の和解、復興計画を視野に入れていた点である。AFSCは戦後の日本においてかつて敵国同士だった人々を集め、和解のプログラムを実施した。ローズはこの国際学生セミナーについて「一番決定的で、効果的な平和教育計画であった」と語っている。このような和解のプログラムを通して、理解し合い、赦し合うことが、人々が再び立ち上がるためには必要であった。フレンド派の人々は、全ての人が「内なる光」をもつと信じていた。かつてフレンド派の人々は敵同士であっても、全ての人々は等しく尊い存在であり、理解し合うことができると信じ、それが平和主義につながっていた。

ローズが、平和や平和主義に関して深く語ることはあまりなかった。しかし、彼女の行動、すなわち救援活動からは、人々の生活を支え、安定した日々を送ることを目指した活動であった。このような救援活動を行うことが、ローズにとっての平和主義であった。ローズの平和主義はフレンド派の信仰そのものであった。

二つ目に、研究を通してわかったことは、エスター・B.ローズは、占領軍にとって、特別なポジションにある重要人物だった点である。戦後、AFSCの駐日代表として来日したローズは、厚木基地に到着し、GHQの宿舎に滞在した。つまり、GHQと限りなく近い存在であった。占領軍のジープを自由に使用し、占領軍専用列車に乗っていた彼女は、GHQの持つ特権を十分に使用していたこの意味で、ローズはGHQの側に立つ人間であった。その一方で、長期にわたる日本での活動から日本語を理解し、日本の文化を知るローズの日本への眼差しは必ずしもGHQとは一致しない。特にローズは救援物資に関しては日本人の側に立ち、アメリカやGHQとの交渉を行っていた。また食糧不足の日本において、ローズは自ら野菜を育てており、日本人に近い生活を試みていたと考えられる。このことは、占領期において、ローズがGHQの人々とは、異なる目線、すなわち日本側に立とうとしていたことがわかった。ローズの視点から占領期みることで、GHQ側からでもなく、日本人の側からでもない第三の視点から占領期を検討することが可能となる。このように占領期においてGHQとは異なる立場で日本に滞在した人々は、宣教師など少数存在したが、これまで研究ではその活動が十分明らかとはなっていない。この点に関しては、今後の課題としたい。

三つ目に、ララ物資は、アメリカの民主主義と平和主義を示す役割の一端を担ったということである。ララは、上からの制度として日本人に与えられた民主主義や平和主義とは異なり、物資という実物を通してアメリカの善意（Good Will）を伝え、日本人に民主主義や平和主義を考えるきっかけを与えた。思想としての平和主義や民主主義を実体験として経験し、そのギャップを埋める役割としてララ物資が効果的に働いたと考える。多くの人々が空腹の時に配布されたララ物資は、「天降る贈り物」の一つとして、日本人に受容されたと考える。

四つ目には本研究を通して明らかになったのは、ローズの活動を支えたクリスチャンネットワークの存在である。アメリカのフレンド派と日本人の繋がりには19世紀後半からはじまった。ローズ自身も来日し多くの人々と友人となったが、このようなネットワークは戦後、ララ物資や平和教育を展開する上で大きな役割を果たした。ローズを中心としたクリスチャンネットワークはフレンド派にとどまらず、さまざまな人との交流が含まれていた。特に戦後ローズが再来日した際には、河井道、神谷美恵子、星野あいなどに会い、普連土女学校や恵泉女学園、津田塾を訪問した。またフレンド派の鮎澤巖や皇室の家庭教師ヴァイニングは、それぞれララ物資をより多く集めるためにアメリカに講演旅行に向かった。そして、国際学生セミナーでは高木八尺やヴァイニング、上田辰之助、前田陽一、神谷美恵子など戦前

からローズの知るクリスチャンが講師として参加した。このような日米のクリスチャンの友好的な関係を若者に見せることも、和解のプログラムにおいては必要であった。戦後日本においてフレンド派は、このような顔の見える対話のプログラムを通して相互理解、ひいては日本における平和の実現を目指した。

最後に、本研究の目的は、戦後日本における平和主義の系譜を明らかにすることであった。そのため、本研究では、その一端としてフレンド派における平和主義の影響を検討した。検討しなければならない点も未だ残るが、エスター・B.ローズという、一人の女性の活動を通して、日米におけるフレンド派の平和主義の一端を明らかにできたと考える。